

## MRI ECONOMIC REVIEW

株式会社三菱総合研究所  
政策・経済研究センター

## 米大統領選の行方(6) 政治不信で非主流派躍進

2016年の大統領選で「非主流派」の候補が支持を集めている背景は、既存の議会や政治への不信が強まったことだ。2000年代のイラク戦争の泥沼化や08年のリーマン・ショックという逆境の中、オバマ政権は変革への党派を超えた期待を集め、09年に誕生した。その後、なぜ政治不信が強まったのか。

最初の2年間は順調だった。上下院ともに民主党が多数派を占め、健康保険加入率を引き上げる「オバマケア」や、大規模金融機関への監督を強化する金融規制改革法などの法案を成立させた。

こうした動きに対し、「小さな政府」を標榜する野党共和党の反発が先鋭化。10年末の中間選挙では保守強硬派とされる草の根運動「茶会」(ティーパーティー)が躍進し下院では共和党が多数派となった。12年の大統領選でオバマ大統領が再選されたものの、議会のねじれの構図は変わらず13年末には予算関連法案の審議が難航して政府機関が一時閉鎖された。

14年の中間選挙では72年ぶりの低投票率が民主党に逆風となり、共和党が上下両院で多数を得た。だが共和党指導部と茶会派との内部対立を背景に、オバマ政権は米欧など6カ国とイランの核兵器保有防止にむけた合意、環太平洋経済連携協定(TPP)大筋合意など実績を上げた。内部対立が続く共和党主流派への不満が、トランプ氏の支持拡大につながった。

リーマン・ショック後の不況から米国経済を立ち直らせたオバマ政権の功績は大きい。だが、景気が回復したことが国民の関心を経済格差へと移し、サンダース氏の支持につながった面もある。

オバマ政権期の上下院多数派		
	上院	下院
2009~10年	民主党	民主党
11~12年	民主党	共和党
13~14年	民主党	共和党
15~16年	共和党	共和党

※本コラムは、日本経済新聞の「ゼミナール」に2016年3月4日から17日まで10回にわたり掲載されたものです。

内容の全部または一部を無断で複写・転載することは禁止されています。